

統合的英語科教育法

村野井 仁

渡部 良典

尾関 直子

富田 祐一

まえがき

本書は統合的な英語教育を実践しようとする英語教師および英語教師志望者のために書かれたものである。統合的な英語教育とは、本書では次の4つの意味を持つ。①英語教育・英語学習を単に異文化間コミュニケーションを促進するものと見るのではなく、学習者の人格形成をめざし、多様性を許容する豊かな社会を構築するものととらえ、英語を身につけることについての異なる目的を統合することによって生徒を育てる英語教育。②特定の言語スキル、例えば読むことに特化するのではなく、聞くこと、読むこと、話すこと、そして書くことの4つのスキルを統合的に育てる英語教育。③指導のあり方だけを考えるのではなく、目標設定、指導・学習実践、そして評価というように一連の教育活動を統合する英語教育。④教師要因と学習者の自律性、心理的要因などの学習者要因を統合する英語教育。このような4つの統合的なアプローチがどのように英語教育実践において展開されるのかを本書では紹介していく。

外国語教育および外国語学習は様々な要因が絡み合う極めて複雑な人間活動であるため、単一のアプローチでは、その総体のごく一面にしか触れることはできない。言語と言語習得・言語教育に関して明らかにされていることを総合的に検討し、それらを統合的に扱うことによってのみ豊かな外国語実践を行うことが可能となる。本書においては、英語教育目的論、英語教育目標論、英語指導法、英語評価論、学習者要因、教員養成、小学校英語教育、および異文化間教育に関する重要問題を検討していく。章の流れに従ってこれらの問題について考えて行けば、英語教育を多様な視点から見ることができ、統合的な英語教育が実践できるようになると信じている。

本書執筆中の2011年3月11日に東日本大震災が起きた。私たち著者は、それぞれが東北に住む者、東北で長く教えた経験を持つ者、そして東北に強い想いを寄せる者である。惨禍を身近で感じながら、命の尊さ、それを支え合おうとする内外の人々のつながりの強さを知った。人と人をつなぐのはことばである。より多くの人々との支え合いを可能にする英語教育がいまこそ大切であることを強く感じている。人を幸せにする英語教育、それはどのような理念と知識と技能によって成り立つのか、真剣に考え本書に提示したつもりである。これからの時代を支える英語教師の一助となれば幸いである。

本書の執筆にあたって、東北学院大学名誉教授畑中孝實先生には原稿をお読みいただき貴重なご意見をいただいた。編集については成美堂の菅野英一氏と小亀正人氏には大変お世話になった。この場を借りてお二人に深く感謝したい。

著者一同
2011年秋

目次

第1章	英語教育の目的：なぜ英語を学ぶのか.....	1
	1. 英語学習の意義.....	1
	2. 教育の目的と英語教育.....	8
第2章	英語教育の指導目標：何をどこまで教えるのか.....	12
	1. 学習指導要領.....	12
	2. コミュニケーション能力の構成要素.....	19
第3章	英語指導方法：どのように教えるのか.....	25
	1. 英語指導目標.....	25
	2. 指導過程.....	29
	3. 授業の流れから見た指導技術.....	31
	4. 主な指導技術.....	46
第4章	英語科学習指導案.....	66
	1. 中学校2年生「英語」：技能統合型の授業.....	68
	2. 高校1年生「コミュニケーション英語Ⅰ」： 授業統合型の授業.....	78
第5章	英語評価と言語テスト.....	88
	1. 言語テストの目的と種類と役割.....	88
	2. よい言語テストの条件.....	95
	3. 英語能力の捉え方と観点別評価.....	99
	4. 言語テストの作成と実施.....	108
	5. 言語テスト・評価のための統計初歩.....	116
第6章	第2言語習得理論と外国語教授法.....	121
	1. 第2言語習得理論.....	121
	2. 外国語教授法.....	128
第7章	自律学習論.....	142
	1. 「学習者の自律」に対する2つのアプローチ.....	143
	2. 認知心理学に基づいた学習ストラテジーと自律した学習者	143
	3. 社会・文化的アプローチと自律した学習者.....	155
	4. 自律した学習者がなぜ重要であるか.....	157
	5. 自律した学習者を育てる授業とは.....	158

第 8 章	英語学習と心理要因	163
	1. 性格	163
	2. 言語適性	165
	3. 学習スタイル	168
	4. 動機	171
第 9 章	英語教師論：プロの英語教師になるために	180
	1. 英語教師の役割	180
	2. プロの英語教師に必要とされる資質と技能	181
	3. 英語教師に必要とされる指導技能	183
	4. プロの英語教師になるために	186
	5. プロの英語教師に必要とされる資質と技能チェックリスト	191
第 10 章	小学校外国語教育	193
	1. 世界の小学校外国語教育の状況	193
	2. 日本の小学校における外国語（英語）活動	197
	3. 小学校学習指導要領における外国語（英語）活動の「目標」	199
	4. 小学校の外国語（英語）活動に関する検討事項	203
第 11 章	英語教育と異文化間教育	213
	1. 異文化間教育とは何か？	214
	2. 異文化間教育に関わる重要な概念	216
	3. 異文化間能力	220
	4. 異文化間教育と英語教育の矛盾	223
	5. 「異文化間教育」の知見を「英語教育」に活かす	224
資料	228
	中学校学習指導要領外国語	228
	高等学校学習指導要領外国語	232
さくいん	237

第1章 英語教育の目的:なぜ英語を学ぶのか

1. 英語学習の意義
2. 教育の目的と英語教育

「先生、どうして英語を勉強しなきゃいけないんですか」と生徒から尋ねられたときに英語教師はどう答えるべきであろうか。まず大切なのは、英語教師を目指す人が自ら英語教育・英語学習の目的を考え抜き、他人から与えられたものではない自分の信念を持つことだと思う。「英語は入試科目だから大切だ」とか、「将来何かの役に立つからやっ」といた方がいいよ」という一面的な答えではなく、英語を学ぶ本当の大切さ、すばらしさを生徒たちに自信を持って伝えられる教師であってほしい。英語を外国語として身につけることは日本に住む私たちにとって、他者とともに豊かに生きる力を育てる上で大切なものであり、学ぶ人たちの生き方に深く結びついたものであることを教師はさまざまな角度から考え続けるべきではないだろうか。

本章では、英語教育の目的について読者が考えるためのきっかけを示したい。英語学習の意義そして教育そのものの目的に関するいくつかの考え方を確認し、それらを土台にして冒頭の生徒の質問に対する自分なりの答えを考えてもらいたい。

1. 英語学習の意義

人は一人では生きられない。支え合わなければ生きていくことはできない。東日本大震災の後、日本に住む多くの人がこのことを深く理解したことと思う。一人でも多くの人と心を通わせて支え合って生きていくためには、心を伝えることばが必須であり、それも一つだけではなくいくつかのことばが使えた方がずっといい。たくさんのことばを身につけられればそれが理想的だが、なかなか難しい。母語 (native language / mother tongue)¹に加えてまずは異文化間交流のために補助言語として使われている英語を身につければ、協同できる人の輪はぐんと広がる。より多くの人との協同、そして支え合いを可能にするため、英語学習は大きな意味を持つ。英語学習は人々の共生につながっている。

このような異文化間交流をねらいとする外国語 (英語) 教育は、学習者のスキルを高め、知識を増やすだけでなく、考え方や価値観にも影響を与える。異なる言語や文化に触れることによって、自分の既成の考え方や価値観が揺さぶられ、より幅のあるしっかりし

1) 本書では、最初に獲得したことばを母国語ではなく、母語と呼ぶ。ことばと国の境は重ならないことが多いからである。

たものになる。このような変化を英語学習に限らず全ての外国語学習はもたらしてくれる。豊かな心を持った個人が、支え合う豊かな社会を作るために外国語としての英語学習は大切なのだと考えることができる（第11章参照）。

以下では、「英語によってより多くの人々とのコミュニケーションが可能になること」そして「外国語学習によって学習者の人間性が育まれること」をそれぞれ詳しく考えてみたい。

(1) 地球上のより多くの人々との相互交流の機会が広がる

英語を使う能力を身につけることによって、ことばや文化の異なるより多くの人々と意思を伝達し合い、相互交流する機会が増える。これは英語が世界のさまざまなところで公用語（official language）または国際補助言語（international auxiliary language）として用いられているからである。大切な点は、英語によって交流するのは英語を母語とする人たちだけではないということである。英語は英米人を中心とした英語母語話者だけでなく、英語以外のことばを母語とする人たち同志を結ぶ言語であることを認識すべきであろう。鎖国を解いて開国した頃には、英米人から「優れた」文化や文明を学ぶために、英米人とつながる英語が大切だと考えられたこともあったはずである。今日ではこのような英米文化への一方的な「あこがれ」から英語を尊ぶのではなく、異なる言語を話す人たちをつなぐ補助言語としての力を英語が持っていることを英語教師も学習者も理解すべきである。日本人が韓国人と話す場合、お互いの母語が分からなければ、英語を補助言語、交流言語として用いて意思の疎通を図ることができる。英語が世界のどのような場所で、どのような人々によって使われているのかを英語教師はつかんでおく必要がある。さらに、英語が広がることによってどのような問題が生じるのかについても敏感であるべきであろう。

1) 英語の広がり²⁾

ゲルマン語（Germanic）に由来する英語がブリテン島から世界へ広がっていく歴史は、17世紀初めに清教徒（Puritan）を始めとする植民者たちがアメリカ大陸へ移住したことから始まる。それ以降アメリカ大陸への英国人の移住者は増加し、18世紀にはボストン紅茶事件をきっかけにアメリカは英国から独立する道を選び、アメリカ合衆国が誕生した。英国は17世紀から19世紀まで強大な大英帝国として植民地政策を進め、英国人はインド、南アフリカなど各地の植民地に支配者として入り込んだ。植民地には政策的に英語が植え付けられたため。アジア、アフリカ各地に英語を第2言語とする国々が生まれた。20世紀にはアメリカ合衆国は政治・経済・軍事の面で強大な力を持つようになり、その圧倒的な力は、英語を世界に広げることには大きな役割を果たしている。

Kachru（1987）は、英語を話す人々を内円（inner circle）の集団、外円（outer

2) 英語がどのように広がっていったか、その歴史を概観するためには Crystal（1987）および McCrum, MacNeil & Cran（2002）、McKay（2002）が参考になる。

circle) の集団、そして拡張円 (expanding circle) の集団の3つに分けている。内円に属するのは英語を母語 (native language / mother tongue) として話す人々、外円に属するのは英語を公用語 (official language) またはそれに準ずる言語として使う人々、そして拡張円は、英語を交流言語、国際補助言語として使う人々の集団であり、拡張円の人々の数は急速に増えている。これらの英語使用者を合計すると、17億人ぐらいの人々が英語を使っており、これは世界の人口の約3分の1に当たる。この事実、つまり、英語は今や英語を母語もしくは公用語として話す人々だけではなく、もともと英語を話さない私たちと同じような言語環境にある人々が、言語や文化の異なる人と英語を媒介として交流していることを理解したい。英語は英米人と話すためのものではないことを生徒に伝えたい。

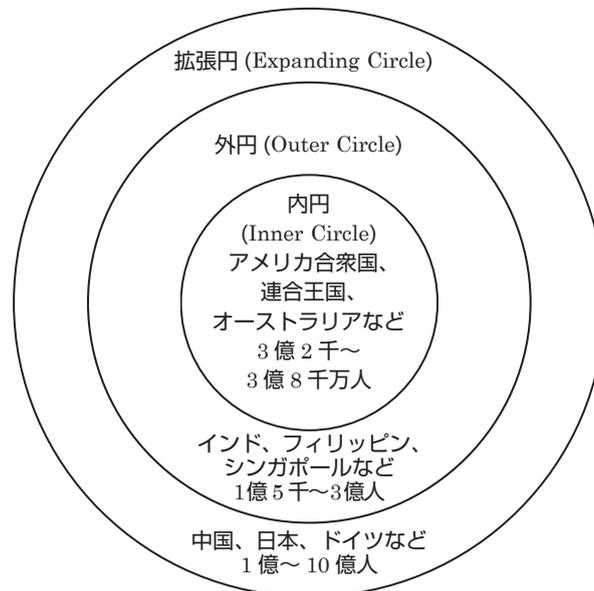


図1-1 Kachruの内円・外円・拡張円 (Crystal, 1997: 54)

2) 国際補助言語としての英語の役割

現代社会において国際補助言語が必要とされているのは、言うまでもなく、経済、政治、科学などの諸分野で国際的な交流が人類にとって必須となっているからである。生きていくために多くの国が他国との交流が必要であり、食べ物や製品、資源などについてお互いに支えあう相互依存関係が国々の間にはある。言語、国籍、民族を超えてコミュニケーションを可能にする言語が必要となり、さまざまな理由から英語が国際補助言語として使われるようになった。³⁾ 世界的な物流、商取引、金融などの経済活動を始め、航空・海運などの国際交通システム、インターネットを始めとする国際通信など多くの分

3) 英語が国際補助言語として使われるようになった歴史的背景については、中村(1898)、鈴木(1999)、McKay(2002)などが参考になる。

野で英語が用いられている。この他、知識や科学技術へ人々を導く点においても英語は大きな力を持っている。科学論文の多くが英語で書かれていること、英語を主な公用語とする学術団体が多く、知の交流のために英語が大きな役割を果たしている。

国際関係の分野においても、英語は大きな役割を果たしている。国際連合（United Nations/UN）では英語は公用語の一つであり、ASEAN、EU、NATO、OPECなどの国際機関においても公用語もしくはそれに準ずる言語として用いられている。この他、マスコミ（新聞、テレビ等）や音楽、映画などの文化面でも英語が用いられることが多く、さまざまな情報や文化が英語を媒介にして、世界のさまざまな人々によって共有されている。イスラム社会から情報を発信するカタールの放送局アルジャジーラが英語でニュースを流すこと、ノーベル文学賞の選考に当たっては英語以外の言語で書かれた作品は英語の翻訳が使われていることなどは、情報・文化の伝達が英語を補助言語として行われていることを象徴的に示している。

このような英語の働きは、経済的・文化的に人々を結びつけるだけではなく、人類が直面しているさまざまな問題に、他民族が力を合わせて対処する際にも大きく役立つと考えられる。災害への対処、環境問題、民族紛争問題、富の偏在、エネルギー問題、人権問題など、国境を越えて人々が力を合わせなければ解決できない問題に取り組む際に、人々をつなぐ国際補助言語がどうしても必要になってくる。これらの地球規模の諸問題への取り組みは、国連などの国際機関や政府機関に関わる人々だけにとめられるものではなく、NGOや市民ボランティア活動の発展とともに、一般市民のレベルでも活発に行われてきている。困難な問題に立ち向かうためにはさまざまな人々の連帯が不可欠であり、多様な人々をつなぐ力を英語が持っていると言えよう。

英語を学ぶ理由として、「英語ができると仕事で役立つ」と考える人も多い。社内公用語を英語にする日本企業も出てきているため、就職のため、仕事のために英語力を高めたいと願う人も多いだろう。しかし、英語が仕事で役立つのは、英語が人と人をつなぐ力を持っているからであり、その本質を見落として単に仕事のための道具として英語を身につけようとするのは英語の豊かさの一面しか見ていないように思われる。企業の活動が単なる利潤の追求ではなく、衣・食・住・交通・通信・福祉・情報・文化などさまざまな角度から人々の暮らしをより豊かにするためにあるのであれば、そこには必然的に多くの人々の間の協力・協同が必要とされ、ことばの異なる人たちとの相互交流が求められる機会が多くなる。だからこそ、より多くの人々と交流できる人が求められるのではないだろうか。「パソコンができると仕事で役立つ」と、「英語ができると仕事で役立つ」ことは、本質的に異なると筆者は考える。外国語としての英語は単なる道具ではなく、人間が他者と支え合って共に豊かに生きるために必要な生きる力なのだと思う。

3) 英語の広がりに伴う問題

英語が世界中の多くの人々によって使われ、より強い力を持てば持つほど、英語を使える人と使えない人との間に社会的格差が生じる可能性がある。これは一般に English

第1章 英語教育の目的:なぜ英語を学ぶのか

divide と呼ばれる現象で、英語を使う人々と英語を使わない人々の間に格差が生じ、前者が支配者、後者が被支配者となることを意味する。英語を生まれつき話す人々が経済的、政治的に英語力を特権として使うことによって得をし、非英語話者は常に不利な立場、支配される立場に立つのではないかという指摘である。かつてスペイン、英国、ドイツ、フランス、米国、ロシアそして日本が強大な軍事力・経済力を持って、帝国として他国を侵略し、植民地を拡大していったように、英語を母語として話す人々が強大な英語の力を使って、他の人々を支配する構図が生まれる可能性がある。英語帝国主義 (English imperialism) である。⁴

英語が出来さえすればそれですべてがうまくいくのではなく、このような問題が生じる可能性もあることを英語教師は知っておくべきであろう。

英語に強大な力を持たせることによって、不平等な関係が生まれてしまうということは、人々の共生を促す英語の働きとは相反するものである。そのような不平等な関係を作り出さないためには、英語だけが素晴らしいという英語優越主義の姿勢を持つのではなく、全ての言語、すべての文化、そしてそれを持つ全ての民族が平等に尊いという基本的な意識を確認することが大切であると思われる。

英語はよく国際共通語だとか、地球語だとか呼ばれることがある。このような呼び方も注意して用いる必要がある。もし、地球上の全ての人が英語を公用語として使うことになると、地球は英語一色で染まり、それぞれの多様な言語と文化は失われる。他民族・多言語国家であったシンガポールで英語が公用語になり、それぞれの言語（中国語、マレイ語など）を英語ほど流暢に話せない、またはほとんど話さない若者が増えていくというような単一言語化・単一文化化が起きているが、これと同じ事が地球規模で起きることになってしまう。このような事態を避けるためには、英語は母語にとって代わるものではなく、お互いの言語が異なる時に相互交流のために用いる国際補助言語 (international auxiliary language) であるととらえることが有効であろう。英語を補助言語として扱えばそれは母語を超えることも、母語を消し去ることもない。さらに、補助言語として英語を使ってコミュニケーションできるようになるのはそれほど難しいことではない。母語話者のように話せなければ、国際的なやり取りができないと考えるのではなく、さまざまな母語を持つ人々がそれぞれの特徴を保持し、尊重しつつ英語を補助言語として使って交流すると考えれば、英語母語話者だけが特権を与えられるということも起こりにくくなっていく。英語母語話者も補助言語として英語を使う人たちに合わせて英語を使うようにするという考え方である。このような動きはさまざまな母語を持つ人々が自分の母語や文化の特徴を保ちながら英語を使用することを許容する world Englishes の考え方と共通するものがある。

さらに、欧州評議会 (Council of Europe) が2001年に策定した外国語学習欧州共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages / CEFR) に示されている複言語主義 (plurilingualism) という考え方も重要である。これは、「特定

4) 鈴木 (1999)、津田 (1990)、本名 (1999)、McKay (2002) 参照。

の学校や教育制度の中で学習可能な言語を多様化すること、または生徒たちに一つ以上の外国語を学ぶように奨励したり、あるいは国際社会における英語のコミュニケーション上の支配的位置を引き下げることで達成される」と考えられている（Council of Europe, 2001[吉島・大橋訳 2004], p.4）。特定の社会に複数の言語が存在する多言語主義（multilingualism）と違って、複言語主義は一人の人間の中で複数の言語・文化が相互に作用し合いながらその人のコミュニケーション能力を構成するととらえるものである。英語至上主義または英語優越主義と呼ばれるような英語だけを大切に思うと、英語と複言語主義は大きく異なっている。日本の英語教育においても、英語とともに母語および他の言語を尊重する態度を育てていく必要がある。

(2) 外国語学習によって人間性・人格を育てる

英語教育に限らず、すべての外国語教育において、学習者の人間性・人格を高めることはその大きな意義の一つとされてきた。外国語学習は単にコミュニケーションの道具を身につけるだけではなく、学習者の考え方、知識、価値観などその人の人間としてのあり方に大きな影響を与えるものである。外国語教育が育てうる人間性・人格とは一体どのようなものか、考えてみたい。

1) 人格形成

外国語教育は、学習者の人格的成長を促す。人格（personality）とはその人の人柄であり、人間的な中身である。では、なぜ、外国語学習によって人格が育つのであろうか。自分とは異なる言語および文化に触れることによって、自分の考え方や価値観が揺さぶられ、新たなものの見方ができるようになると考えられる。2001年に欧州評議会（Council of Europe）が公開した外国語教育のガイドライン、CEFR には外国語教育の目的が以下のように示されている：

（前略）… it is a central objective of language education to promote the favourable development of the learner's whole personality and sense of identity in response to the enriching experience of otherness in language and culture (Council of Europe, 2001, p. 1)

言語と文化における異質性という豊かな経験を通して、学習者の全人格（whole personality）とアイデンティティが育まれ、それを促すのが外国語教育の目的であると CEFR は明確に論じている。

アイデンティティの発達を促すことは外国語教育の重要な目的となる。異なる文化、異なる価値観を持った人々と異文化間交流をしていくためには、自分がどういう人間であるかをしっかりと特定できなければならない。アイデンティティが十分に育っていないと、例えば、英米人などの英語母語話者を自分たちより優れた民族と考えて、自分や

自分の文化を卑下してしまうようなことになりかねない。一方で、「日本人として」という国家の枠で自分のアイデンティティを確立しようとする、自分たちと外国人を対立的にとらえ、排他的な二項対立的認識を身につけてしまう危険性もある（富田・パーメンター 2000）。さらには偏狭なナショナリズムや、「日本人が一番」といった自民族中心主義（ethnocentrism）に陥り、他民族を差別するようなことになり、円滑な異文化間コミュニケーションとは正反対の方向に進んでしまう。

異なる他者を差別しない、異なるものを受け入れる寛容さ（tolerance）が異文化間交流には不可欠であり、この姿勢は外国語学習においてこそ育つものだと考えることができる。

異なるもの、異なる人々、異なる考え方との出会いを通して、自己を確立し、自分とはどのような人間でどのような弱さを持ち、どのような良さを持っているのかを客観的に把握できるようになる。このことが外国語学習のねらいのひとつである。

2) 言語理解・文化理解

母語とは違う言語を学ぶことによって、言語そのものへの関心を深め、ことばの構造や働きについての理解を深めることも外国語教育の意義の一つである。外国語を知ることによって母語についてもよく知ることができるようになるのも、ことばそのものへの理解が深まるからである。ことばについて理解を深めるということは、言うまでもなく、ことばを使う人間についての理解を深めることにつながっている。

言語と文化は切り離せないものであるから、外国語理解が深まれば、他文化をより適切に理解することになり、個人の視野を広げることができる。さらに異文化理解は自分化理解を助けてくれることも多い。つまり、他文化という鏡に自分化を映して見ると、自分化の中にいるときには見えなかった自分化の特徴が見えてくるのである。海外に行くとき日本の特徴がよく把握できるのはその例である。このように他文化を理解することによって自分の文化を客観的・相対的に見るようになることも外国語学習の大きな目的の一つである。⁵⁾

3) 認知的技能の育成

外国語の複雑な言語体系を学習することによって、学習者の論理的思考力が育てられるので、外国語教育はこのような認知能力の発達をねらいとして行うという目的論がある。Stern（1993: 72）は、外国語学習によって、次のような認知的技能が育てられると主張している：

観察力
識別力

5) 大津他（1988：150）は、ことばについて客観的に考え、言語について語る言語（メタ言語）を操る能力を身につけることによって、「個別言語の相対性を理解し、さらにより一般的に、個別文化の相対性を理解する」ことができると論じている。

分析力

情報収集力、分類、整理する力

データを記憶し、想起する力

規則を作り上げ、応用し、修正する力

課題解決力

推論する力 など

4) 海外文化・文明輸入

日本には、先進国の文化・文明を自国に取り入れるために、その国の言語を学んできた長い歴史がある。隋や唐から中国語（漢文）を通して仏教文化を取り入れ、明治時代にはオランダ語、英語、ドイツ語、フランス語を通してヨーロッパから西洋文明を輸入した。この目的においては、外国語は優れた文化や文明を伝える媒介とみなされ、文章を読み解くことが中心となっていた。単に情報を得るだけではなく、新しいもの、自分にはないものを積極的に取り入れようとする態度をも養うことができると考えられている（垣田編 1979 参照）。

現代においても海外の情報を取り入れることは外国語学習、特に英語学習の大きな目的の一つでありうる。しかしながら、英語文献が読めれば、それだけでよいというふうには、情報の取り入れだけを英語学習の唯一の目的としてしまうのは、一面的なとらえ方だと言わざるをえない。

以上の4つの外国語学習の目的は、どれも何らかの形で学習者の人格、つまり人間としての中身を育てることにつながっている。

2. 教育の目的と英語教育

ここまで、外国語として英語を学ぶ主な目的として、より多くの人と心を通わせることができること、人格を育てることができることの2点を確認した。本節では、日本の中学・高等学校で行われる英語科教育の目的を明確につかむため、上記の英語学習の意義が教育そのものの目的とどのように関わるのかを考察する。教育という営みが何を目的として行われるのかを考え、それに基づいて英語教育の目的を見直して見ることは、英語教師にとってきわめて重要なことである。なぜ学校で英語を学ぶのかという問いに直接向き合うことになるからである。

(1) 教育の目的

教育の目的に関しては、当然さまざなな考え方がある。しかしながら、現代の民主主義社会においては、(1) 個人的人格・人間性を育てること、(2) 豊かな人格・人間性を持った個人を育てることによって平和で豊かな社会を作り上げることの2つは、普遍的な教育の目的として共有されていると考えることができる。

第1章 英語教育の目的:なぜ英語を学ぶのか

このような教育のとらえ方を示す例として、1989年に国連総会で採択された「子どもの権利に関する条約」第29条「教育の目的」を見てみよう：

- (a) 子どもの人格、才能ならびに精神的および身体的能力を最大限可能なまで発達させること。
- (b) 人権および基本的自由の尊重ならびに国際連合憲章に定める諸原則の尊重を発展させること
- (c) 子どもの親、子ども自身の文化的アイデンティティ、言語および価値の尊重、子どもが居住している国および子どもの出身国の国民的価値の尊重、ならびに自己の文明の異なる文明の尊重を発展させること。
- (d) 全ての諸人民間、民族的、国民的および宗教的集団ならびに先住民間の理解、平和、寛容、性の平等および有効の精神の下で、子どもが自由な社会において責任のある生活を送れるようにすること。
- (e) 自然環境の尊重を発展させること

(解説教育六法編修委員会編 2011: 121)

この条文によれば、教育は一人ひとりの人格・能力を高め、自己を確立させ、自らの力で人間らしく生きる力を育てるために行われる。そして、このような人間性と知性に富んだ個人の存在と個人同士の協調によって、争いや差別のない平和で豊かな社会を築くことをめざしている。これは教育に私たちが委ねる人類共通の希望であると言えよう。

このような立場に立った教育の目的は、日本の「教育基本法」第1条にも明確に示されている：

教育基本法第1条（教育の目的）

（旧法）「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」

（改正後）「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家および社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」

教育基本法は、戦前の教育勅語（明治23年10月30日公布）に代表される国家主義的教育の反省に立って、民主主義、人権尊重、平和主義などの人類普遍の理念を教育の力で実現させようと昭和22（1947）年に制定されたものである。偏狭な国家主義や特定のイデオロギー等に飲み込まれず自分の力で考え判断する知性、一人ひとりの大切さを認められる価値観、そして平和で豊かな社会を作り出すために必要な態度を育てることの大切さが、旧法の条文に盛り込まれている。平成18（2006）年の改正によって、真理と正義を求める態度、個人の価値の尊重、勤労と責任を重んじることなどは、第2条の教育の目標に含まれることになった。

(2) 英語科教育の目的

上記のように、生徒一人ひとりの人間性・人格の発達を促し、さまざまな人々が協調しながら共生できる社会を作り上げることを教育の目的とした場合、英語という教科が何をめざすべきなのかが明らかになってくる。英語という外国語の学習を通して、(1) 生徒個人の人間性・人格の発達を促すこと、(2) さまざまな人々と協調し、多くの課題の解決を共にめざすことを可能にする能力・知識・態度を育てることの2つは英語科教育の目的に含まれるべきものであろう。

本章第1節で確認した英語学習の2つの意義は、この2つの目的とそれぞれに重なるものと考えられる。英語という外国語の学習を通して人間性を高めるという英語学習の意義が、個人の豊かな人格を育てるという第1の教育の目的に即している。また、より多くの人々と心を通わせる力を育てるという英語学習の目的は、上記の第2の教育の目的に強く結びつくものである。つまり、英語力は、異なる価値観、異なる言語を持つ人々との相互理解、相互協力を進めるものであり、平和で豊かな社会を形成するための欠くべからざる土台になると考えられる。⁶⁾

ここで大切なのは、学習者の全人格を育てるという目的と協調・共生のための英語コミュニケーション能力を高めるという目的は、お互いに支え合いながら育つものであるということである。かつて、英語教育の目的を実用か、教養かとどちらか一方に限定して考えていた二項対立的な狭い目的論は、現代の英語教育の意義を考える上では偏ったものとして避けるべきであろう。豊かな人間性とそれを社会の中で生かすための運用能力を共に育てていくことが、現代の英語教師に切に求められている。

○まとめ

本章では、平和で豊かな社会の形成に貢献できる豊かな人間性と能力を持った個人を育てることが、現代の英語教育の目的であることを確認した。英語教育の目的を入試のためとか、実用のためとか、仕事のためとか、一面的にとらえるのではなく、個人および社会にもっと本質的なところで深く、広く、かつ長期的に関わるものとしてとらえることが英語教師にとって重要である。

英語教育の目的について、さらに深く調べたい読者には、垣田編(1979)、Rivers(1981)、Stern(1993)、Cook(2008)等が参考になる。

課題1：中学1年生または高校1年生を受け持った際に、第1回目の英語授業で配布する(と想定して)英語通信を作成しよう。なぜ、英語を学ぶ必要があるのか、教師としての自分の考えをわかりやすく書いてみよう。

6) このような目的は、特に異文化理解の観点から英語教育をとらえる立場で、重視されることが多い。例えば、和田(1999: 7)では、英語科の指導目標として、次の文が掲げられている：「国際社会の平和と繁栄のために、異なる文化を持つ人々と英語を使用してコミュニケーションを図ろうとする意志と能力を持つ人材を育成する」。

参考文献

- Cook, V. J (2008). *Second language learning and language teaching (4th ed.)*. London, UK: Hodder Education.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge UP. [吉島茂・大橋理枝他(訳)(2004)『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社]
- Crystal, D. (1997). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge UP. [國広正雄(訳)(1998)『地球語としての英語』みすず書房]
- McKay, S. (2002). *Teaching English as an international language*. Oxford: Oxford UP.
- McCrum, R. MacNeil, R. & Cran, W. (2002). *The story of English (3rd ed.)*. Penguin.
- Rivers, W. (1981). *Teaching foreign language skills (2nd ed.)*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Stern, H. H. (1993). *Issues & options in language teaching*. Oxford: Oxford UP.
- 大津由紀雄・坂本勉・乾敏郎・西光義弘・岡田伸夫(1998)『岩波講座言語の科学 11 言語科学と関連領域』岩波書店
- 解説教育文法編修委員会(編)(2011)『解説教育文法平成23年版』三省堂
- 垣田直巳(編)(1979)『英語教育学研究ハンドブック』大修館書店
- 鈴木孝夫(1999)『日本人はなぜ英語ができないのか』岩波書店
- 富田祐一・リン・パーメンター(2000)「世界から見た日本の英語教育2:なぜ英語教育を行うのか」『英語教育』2000年5月号第49巻第2号 pp.40-41
- 津田幸男(1990)『英語支配の構造』第三書房
- 中村敬(1989)『英語はどんな言語か』三省堂
- 本名信行(1999)『アジアをつなぐ英語—英語の新しい国際的役割』アルク新書
- 和田勝明(1999)『英語科における国際理解教育』『英語教育別冊』第48巻第3号。大修館書店
(村野井 仁)